

令和5年度

研究委員会 活動報告書



- | | |
|--------------|--------------|
| 1 国語科 | 8 体育・保健体育科 |
| 2 社会科 | 9 家庭、技術・家庭科 |
| 3 算数・数学科 | 10 外国語活動・英語科 |
| 4 理科 | 11 道徳・特別活動 |
| 5 生活科・総合的な学習 | 12 特別支援教育 |
| 6 音楽科 | 13 健康教育 |
| 7 図工・美術科 | |

上高井教育会

委員会一覽

No.	委員会	委員長	学校	世話係	学校
1	国語	小林 順	森上小	宮入 勝彦	旭ヶ丘小
2	社会	吉田 正人	相森中	松澤 裕子	高甫小
3	算数・数学	丸野 悟	常盤中	上野 恵佐夫	豊洲小
4	理科	小林 秀行	東中	小林 俊子	常盤中
5	生活・総合	北沢 俊樹	井上小	伊賀 雅志	日滝小
6	音楽	大里 えみ	森上小	中村 新治	日野小
7	図工・美術	永井 文章	小布施中	鬼石 喜明	井上小
8	体育・保体	越田 真二	日滝小	松本 孝志	森上小
9	家庭，技術・家庭	原山 康則	常盤中	新井 孝之	東中
10	外国語活動・英語	小林 哲也	小山小	桂本 和弘	小山小
11	道徳（特別活動）	中澤 智徳	豊洲小	前田 博展	栗ヶ丘小
12	特別支援教育	中島 志乃	旭ヶ丘小	小松 賢吾	須坂小・須坂支援
13	健康教育	酒井 めぐみ	井上小	富沢 孝	仁礼小

研究推進委員会

委員長	梅本 裕之	豊丘小	副委員長	小林 英一	高山小
委員	山本 一樹	小山小	委員	田村 中	仁礼小
//	松倉 邦幸	高甫小	//	土屋 一弘	常盤中
//	矢澤 拓真	東中	//	関谷 北斗	小布施中

令和5年度 国語研究委員会実施報告

<委員会研究テーマ>

言葉の力を育てる国語教室をどうつくっていくか

～子どもが「できた」「わかった」と自信をもてる国語学習を目指して～

<授業学校学級・授業者・単元題材名等・指導者>

授業学級 井上小学校1年松組

授業者 川上 一将 教諭

単元名 単元名, 教材名 せつめいする 文しょうを よもう 「じどう車くらべ」

指導者 駒ヶ根市立赤穂東小学校 吉越秀之 校長先生

<研究の成果>

今年度は、昨年度までの研究の成果と課題をふまえ、井上小学校の川上先生に授業者を引き受けていただき、11月の研究会に向けて推進委員を中心に授業づくりを行った。推進委員会では、義務教育段階における「読むこと」に関わる系統性を意識しながら、小学校1年次につきたい言葉の力を焦点化し、説明文を教材として授業を構想した。説明文の読み取りにあたり、「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること」、「文章の中の重要な語や文を考えて選び出すこと」を指導事項に定め、その力を伸ばすための手立てとして、学習ノートの工夫、児童同士が主体的に学び合える学習形態の設定、思考を整理するための視覚支援の在り方（ICT器機の活用、イラストの掲示）を中心に研究を深めた。

公開授業後の研究会では、児童が、学習ノートに入れる語句を考える過程で叙述や挿絵に返って内容の理解を深めている姿や、級友と学び合いながら言葉を吟味している姿などがあげられ、言葉による見方・考え方を働かせながら「読むこと」の力を高めていく様子が語られた。一方で、学習ノートの構成や使い方、ねらいにせまる発問については、さらに研究していく必要があることが示唆された。

来年度は、今年度の成果や課題をもとに、さらに研究を進めていきたいと考えている。

<指導者の先生のご指導>

・「聞く」、「話す」など基本的な学習の姿勢が身に付いている1年生で素晴らしい。また、教師の発問に対する追究力もあった。

・子どもが自分の考えを発表する場面が多くあり良かった。ああいった経験が子どもを育てる。子どもが自分の語彙で語り切れない部分も教師が適切に支援し、言葉を助けていた。

・机間指導が丁寧に行われていた。「個別最適な学び」が求められ、様々な手法も出てきているが、低学年段階ではやはり机間指導を大切にしたい。

・本時のように本文の内容をまとめる穴埋め形式のときには、それによって「つきたい力」は何なのかを吟味することが大切である。結果として子どもが考えを書き入れられるかどうかではなく、書くときにどう思考しているかを意識するとよい。目的があるから学習活動が決め出される。

・バスのイラストは、視覚支援として効果的だった。子どもたちの思考が活性化されていた。教科書においても、絵も重要なテキストの一部である。

・本時で用いた学習ノートは、整理してとらえさせようという意図があったため、どちらかという学習カード、ワークシートとしての意味合いが強かったように思う。学習ノートは、自身の考えや級友の意見が入ってくる、広がりがあるものではないかと思う。

<参加者のアンケートから>

・書画カメラをあんなに活用していてすごいなと感心しました。

・廊下の掲示がとても素敵でした。子どもたちの字がきれいなことにもびっくりしました。授業の中にも様々なルールがあり、授業者の先生がされてきた学級づくりがわかりました。

・個人追究ができ、待てる、お助けマンを呼ぶ、喜んで教える（この教え方も答えを伝えるのではなく、見つけ方や声のかけ方）の素晴らしい子どもたち。先生との関係もとてもよく、生き生きと過ごしている毎日が目に浮かびました。

- ・個人追究と協働追究の場面があり、みんな自分の考えを話したいことが伝わってきました。授業形態が工夫しており、みんなが活躍していました。
- ・教科書を手を持って、言葉の一つ一つにこだわりながら友だちと話し合う姿が素晴らしかったです。
- ・改めて、言葉の一つ一つ、語彙の一つ一つについて吟味して教材を考えていかなければいけないなと思いました。
- ・中学生しか教えていないので、小1段階での説明文の読み取りの方法をグループ研究で学ばせていただきました。とても充実した時間でした。
- ・小学生の学ぶ姿というのは見慣れなかったので、新鮮に映りました。この頃からの積み重ねが中学生の学力の土台になっているのを改めて感じました。学びの出会いが一番大切だと思いました。
- ・郡研は、教育課程と集約して実施してもいいのではないのでしょうか。
- ・負担軽減。郡研そのものの存在を考え、もっと広い地域の研究会にしてはどうでしょうか。
- ・学校でいろいろと忙しい中での研究なので、難しいところがあります。偏らずにできるとよい。
- ・郡全体の学級数も減っている中で、毎年全教科を設定していることに無理があるのではないかと。
- ・「教育課程で各教科の授業公開」という形が今後も変わらないのならば、この大して大きくもない郡の中で、毎年「もう一人」授業者を出している、ということに無理が来ているのではないかと思います。それよりはテーマにそって実践例を紹介し合ったり、何か教材を決めてとことんじっくり研究したりするというのも面白いのではないかと思います。
- ・公開授業は負担が大きい。小学校も単級化が進んでおり、同学年の先生方が集まって、郡単位の同学年教科会のような形で教材研究ができるような場にするのを考えたい。
- ・「これまでの形」ではなく「新しい形」を探っていく段階なのではないかと感じています。せっかくなのだから、参加した人、関わった人がそれぞれ「面白かった」「自分もやってみたい」と思うようなものを持ち帰ることができる場となればうれしいです。
- ・推進委員の先生方のご尽力で、フル規格の郡研がようやく戻ってきました。ぜひ続けていきたいと思えます。
- ・やはり授業を参観して語り合える研究会は良い。いろいろな先生方と国語教室について話し合えることがうれしく思いました。

<来年度へ向けて>（研究テーマ・指導者 等）

- ・研究テーマや授業づくりの方向については、授業者の課題意識や目指す子どもの学びの姿を大切にしながら決めていきたい。
- ・指導者については、昨年は県外、今年は他郡市から来ていただいた。貴重な指導を受ける機会ではあるが、渉外が煩雑になってしまうことや高額な交通費がかかってしまうなどのデメリットもある。来年度については、研究の方向に沿ってできる限り近隣で選定できるとよい。

<運営面での反省、改善点>（日程・予算・推進体制 等）

- ・研究推進の会合は16:30からが基本となっているが、勤務時間内に終わることは現実的には非常に難しい。他の委員会はどうのような工夫をしているのか。
- ・授業公開をすることは大きな意味があるが、どうしても個人に業務が偏ってしまう。また、推進委員以外の参加意識も乏しくなりがちである。理事会や研究企画等で授業者や研究推進委員については人選をお願いしたい。
- ・今年度もいくつかの学校で複数の授業を公開することになった。会場校に負担をかけてしまうことはもちろん、事前の打ち合わせの必要性なども生まれ、本来の研究以外のところで時間をとられてしまうので、やはり授業者の選定については難しさを感じる。
- ・研究アーカイブにアップロードしたうえに、さらにメール配信もする文書があったり、研究報告書とは別に会誌への原稿も書いたり、一つにできそうな業務はまとめたらどうか。
- ・予算は、研究方法や指導者の選定等、幅広い選択肢をもてるよう、今年度なみの予算を計上したい。

令和5年度 社会科学研究委員会実施報告

<委員会研究テーマ>

「子どもと共に創る授業 ～子どもの問いを紡ぐ授業～」

<授業学校学級・授業者・指導者・単元題材名等>

単元名 「市のうつりかわり」
 授業学級 旭ヶ丘小学校3年敬組 計19名
 授業者 3年敬組担任 雪入 さやか 教諭
 指導者 墨坂中学校 坪井 扶司夫校長先生

<研究の成果>

今年度の研究では、教材や資料をクラスルームや研究会で共有し、意見交換していく中で、資料の精選や提示方法を工夫したり、自分の家族や学芸員さんから話を聞いたりすることで児童が須坂市に興味関心を持ち、そこから「須坂市のうつりかわり」について自ら「問い」を立て、単元を通して主体的に取り組んでいく授業づくりを検討してきた。また、調査活動や友達と意見を共有するツールとして、ICTをどのように活用していくかも研究を深めてきた。

<資料の精選・提示>

単元の導入に当たってどのような資料を提示することで児童の興味関心を持たせられるか、研究委員会でたくさん議論が交わされた。どこの写真が使うか、小学校区だけいいか須坂市全体にするか、昔の写真だけにするか現在の写真と比較させるかなど先生方と検討する中で、須坂市立博物館の学芸員さんの協力も得て、資料の準備を進めた。当日は地域や須坂市内の昔の写真をスクリーンに映し出すと、児童たちはどこの場所か興味をもって見ており、現在の写真で地域の変化に驚いていた。「なんで」「今と全然違う」など児童が疑問をもち、その後の授業に主体的に取り組むきっかけとなった。

<ICTの活用について>

一人一台端末が普及して、3年生でもジャムボードの扱いに慣れている感じであった。そのジャムボードを使って、昔と現在の地域の変化についてまとめた。ICT(ジャムボード)により、なかなか発言できない子どもにとっては自分の考えをアウトプットできること、自分のつぶやきをジャムボードへ記入できること、友達の意見(同じ意見だけでなく、自分と違った意見も)を同時に共有できることなど、児童が友達と関わりながら自分の学びを深めることができた。

<指導者の先生のご指導>

○社会的事象の見方・考え方について

- ・見方=視点【～に着目して】 考え方=方法【比較, 分類, 総合, 関連付けして考える】
 単元目標、単元展開の中に明確に反映されて書かれている。

○単元構想のよさについて

- ・初めて歴史的な内容を学ぶ3年生のための工夫が多くあった。
 「予想をまとめたこと」「旭ヶ丘地区の学びから須坂市へ展開していく」
 「実感を伴った学び」「地域に対する愛着・誇りを育むことを単元の終末に設定」

○本時の授業構想のよさ（単元の事象への直面の一時間だった。）

- ・既習を活かした予想
- ・ゲストティーチャーの存在
- ・視点ごとに整理することのよさ
- ・意見の共有・問い返し

○今後に向けて

- ・ゲストティーチャーと授業者との関わり
- ・「学区外」という子どもたちの眩きから見えてきたこと⇒視点を広げるための教師の出の大切さ
- ・単元の学習問題を据えるために疑問点や調べたいことに視点を向けた発問をするとさらによかった。
- ・地域素材を学年ごとの年間指導計画の中に落とし込んでいくことの大切さ

（詳細は、研究アーカイブに全文掲載）

<今後の課題>

<資料の精選、外部講師との関わり>

写真資料だけでなく、航空写真や地図などの資料も活用すること、外部講師（学芸員さん）と児童とのやりとりの中での教師の関わり方、生徒の疑問を引き出す問いかけなど今後も児童生徒が主体的に学習に取り組むための手立てを研究していく。

<ICTのさらなる活用>

授業の中でジャムボードやタブレット端末などICTの活用が進んできている。さらに児童生徒の学習が深まるための工夫や活用法を教師間や学校間で共有できる取り組みを進める。

<来年度へ向けて>（研究テーマ・指導者 等）

推進委員会では毎回充実した議論をすることができ、委員の先生方の経験や知識からそれぞれ学ぶことが多く、研修として大変有意義である。一方で近年は委員数が減少傾向にあり、授業者選定に苦慮することもたびたびあった。さらに委員会活動にどうしても時間がかかってしまい、研修として貴重な機会であるが、委員の先生方も校務負担が多く、生徒指導など緊急の用務もあり、参集することが苦しいこともあったので、会議の精選やリモートでの開催などの工夫も行っていきたい。また、郡研当日についても公開授業にこだわるのではなく、地域教材の共有やICT機器の活用状況など教材研究を手分けして行い、普段の授業にすぐに活用できるような活動内容や情報交換も行っていきたい。

<運営面での反省、改善点>（日程・予算・推進体制 等）

コロナ禍の制限が無くなり、予定通りに研究推進委員会を開催することができた。また先生方が参集する機会も増えて研究推進委員会の活動も充実したものになりました。来年度についても参集とリモートを上手に使い分けて、先生方の負担を軽減しながら充実した活動ができるように実施する方向で良いかと思えます。

※12月25日(月)までに研究アーカイブへUP願います。また、各教科の研究委員へ配信をお願いします。（事務局への提出は必要ありません）

令和5年度 算数数学研究委員会実施報告									
<p><委員会研究テーマ></p> <p style="padding-left: 20px;">問題解決に必要な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育む学習指導</p>									
<p><授業学校学級・授業者・指導者・単元題材名等></p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 30%;">授業学級</td> <td>小山小学校 5年西組</td> </tr> <tr> <td>授業者</td> <td>清水 貴雄 教諭</td> </tr> <tr> <td>指導者</td> <td>須坂市教育委員会 松木 智子 先生</td> </tr> <tr> <td>単元題材名</td> <td>単位量あたりの大きさ</td> </tr> </table>		授業学級	小山小学校 5年西組	授業者	清水 貴雄 教諭	指導者	須坂市教育委員会 松木 智子 先生	単元題材名	単位量あたりの大きさ
授業学級	小山小学校 5年西組								
授業者	清水 貴雄 教諭								
指導者	須坂市教育委員会 松木 智子 先生								
単元題材名	単位量あたりの大きさ								
<p><研究の成果></p>									
<p>1 本時の授業（実際の授業）</p> <p>(1) 主眼</p> <p style="padding-left: 20px;">広さも人数も違う部屋の混みぐあいを考える場面で、畳1枚あたりの人数や1人あたりの畳の枚数に着目し、単位量あたりの大きさを混みぐあいを比べることを通して、どの部屋が一番混んでいるかを説明することができる。</p> <p>(2) 展開の概要</p> <p>①実物の畳や憩いの場でくつろいでいる写真から、畳1枚あたりの人数の求め方や、1人あたりの畳の枚数について言葉の式で表し、学習問題を把握する。【全体】</p> <p>②本時の学習課題を確認する。【全体】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p style="padding-left: 20px;">1あたりの数を求めて、混みぐあいの比べ方を考えて、どこが一番混んでいるか説明しよう。</p> </div> <p>③それぞれの部屋の混みぐあいを考える。【選択追究（個人・ペア・グループ）】</p> <p>④スプレッドシートを用いながら常時共有をする。【全体】</p> <p>⑤全体で困っていることや考えていることを共有する。【全体】</p> <p>⑥スプレッドシートで本時の振り返りをする。【全体・個人】（予定していたが実施できず）</p> <p>2 研究協議</p> <p>【授業者反省】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業者がこの単元に対して苦手意識を感じていた。せっかくの機会を頂いたので今単元を設定した。導入場면을丁寧にしよう意識する余り、時間がおしてしまい追究の時間を十分に確保することができず、まとめまでいくことができなかった。 <p>【質問】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進み方が少し早いのではと感じた。最後の方はもう少しゆっくりでもいいと感じたが、早めた理由は何か。 <p>【全体（グループ）協議】</p> <p>①畳の実物を導入場面で用いたことは、子どもたちが学習問題を理解し、自ら課題を追究しようとする姿につながったか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畳の実物を用いたことは、非常に効果的であった。また、半分の写真もとてもよかった。 ・子どもが実際に畳に乗ってみる活動があってもよかったのではないか。 ・畳の実物、写真も掲示してあったので、子どもが均等に並んでいる写真を用意してもよかったのではないか。 <p>②追究場面で選択追究（個人・ペア・グループ）の形態を取り入れたり、スプレッドシートでの常時共有を取り入れたりしたことは、子どもが学びを自己調整する手立てとして有効であったか。</p>									

- ・自分の考えが発表しやすいペアやグループだったのがよかった。自分の考えを言える関係性の中で追究を進めていっている様子があったよかったです。
- ・自由に動く、動かないは様子を見ていて普段からやっているのだなと思った。スプレッドシートも「開いて」と言わなくても当たり前にあるというのが良い形だと思う。誰かが書いたのを見ながら「それは分かる」と言っている子がいた。言語化するのは難しい。スプレッドシートに書き込めるのはレベルが高いことだと思う。
- ・子どもたちが自由に選択できる良さもちろんあるが、ペアやグループが固定化される、同じ理解度の子が集まるという傾向があるような気がする。わからない子たち同士が集まってなかなか手が進まない様子も見られた。そこは難しさだと感じた。
- ・スプレッドシートも合う单元、合わない单元があると感じた。单元を見通して何を使うのか吟味する必要があるのではないかな。

<指導者の先生のご指導>

- ・新しい単位、新しい概念の導入なので丁寧に扱いたい。2つの数量関係を視覚化して、子どもたちが実感を伴って理解することが大切。1時間まるまる導入でもよいと思う。
- ・学習問題を提示され、「ごちゃごちゃしている（比べにくい）」という反応が出れば、「どこから比べればよいか」と発問して「畳の枚数が同じなら、人数が多い方が混んでいる」を引き出したり、「他に困ることは何か？」と発問して「畳も人も違うから分かりづらい」を引き出したりして、課題を明確にしていくとよい。
- ・追究に入ってから「困っている人いる？」という先生の全体への投げかけがあったが、もっと早くその言葉を出してあげたかった。また、追究開始後すぐに選択追究にしたが、たとえ3分でもいいから、個人追究の時間を確保したかった。
- ・選択追究の際は、子ども達が「学習したいときに、なぜそのグループになるのか。なぜその子のところに行くのか」も見とってほしい。

<今後の課題>

○個別最適な学びと協働的な学びの一体化を考える際の、グループやペア学習・ICTの有効な位置づけを考えていきたい。

<来年度へ向けて>（研究テーマ・指導者 等）

○研究テーマについて

- ・来年度も今年度同様の研究テーマで進めていきたい。

○指導者について

- ・来年度になったところで検討していく。

<運営面での反省、改善点>（日程・予算・推進体制 等）

○良い。（複数）

- 子どもたちを下校させてから余裕を持って参観することができ、大変ありがたかった。
- 案内等、分かりやすく示していただきありがたかった。
- いろいろな先生のご意見をうかがう時間がたっぷりあってありがたかった。
- 半日でまとまっているのがよい。

令和5年度 理科研究委員会実施報告

<委員会研究テーマ>

「主体的・対話的で深い学びを実現する理科学習」
～小中連携した単元構想を通して～

<授業学校学級・授業者・指導者・単元題材名等>

授業学校学級：須坂市立小山小学校 3年東組

授業者：山本 一樹教諭

指導者：畔上 一康先生（信州大学 学術研究院 教育学系 教授）

単元名：じしゃくのせいしつ

<研究の成果>

【教材の価値】

・実験の始める前から理科室にきて取り組むなど意欲的な姿があった。そこには、初めて磁石に触れて感じた磁石の疑問を自分たちで解決しようとする姿を引き出すために、強さが違う複数の磁石や、砂鉄やクリップ、モールやビニールタイなど多くの実験道具を用意するなど、教材を研究した成果だと感じた。

【教師の子どもとの関わり】

・見つけたことを我先に先生に話す子どもたちの姿が印象的だった。先生との対話で思考を整理したり、先生との対話を足場にして新たな追究に挑戦していたりする姿が見られ、「教材に触れる中でこんなことを考えてほしい」という願いの成果だと感じた。

【子ども同士の関わり】

・自分の殻に閉じこもることなく個人追究をし、友と関わりながら自分の発見したことを嬉しそうに友達に話すなど、自信をもって語る姿が自然と生まれていた。

<指導者の先生のご指導>

○今回の授業実践の背景にあるもの…知識として獲得するためにやったわけではなく、科学する子どもを育てたいということが前提。

- | | |
|------------------|----------------|
| ・子どもと対等に材に向き合う教師 | ①協働的探求者としての指導観 |
| ・材の核になる特性を探る教師 | ②教師の教材観 |
| ・学習過程の前提になる子ども観 | ③教師の子ども観 |
| ・学習過程の前提になる授業観 | ④個性が生きる授業観 |
| ・子どもの学びの様相 | ⑤子どもの学び観 |
| ・子どもに即した授業展開 | ⑥構成主義的授業観 |

○教育のカタチ

子どもと共につくる教育（構成主義）⇔子どもに教え込む教育（実証主義）
模倣的様式から変容的様式への転回へ。なぞっているだけでは文明は崩壊していく。

○子どもの学び（学力）をどうとらえるか

数値化しやすい学び【知識・技能】＝させることによって習得できる学び（教師主導可）
数値化しにくい学び【考える・感じる・働きかける・願う・表現する】＝することによって習得される学び（子ども主導可）
今後は、数値化しにくい学びの部分が、ウエイトを占めていく。

○既存の科学的内容の習得

科学する（したい）体の育成へ 何を学ぶか？→如何に学ぶか？

子どもの意識と教材化に基づく学習の構造化（指導案【磁石の全体図①】）全体構造をとらえておく必要がある。個別と協働のサイクルでやっていくときには非常に重要。

○磁力は「見えない」けれど、子どもたちは「見よう」としていた。

○子どもがやりたいことをやらせればよいのか？

△活動が刹那的、断片的になると、活動が野生化していく。

◎個々に願いや問いをもって（連続的に）深めていく。やりたいことをやってみた→そうしたら○○になった。という事実の集積が大切。事象を解釈するには→他者とのず

れや既有経験とのずれから→問いが生成されていく。

●学習記録をもう少ししていねいにとっていくことが今後必要。

○この子がしているのは、あの子がやっているのと別の世界だということ認識しておく必要がある。「光はたぶん粒」というのは、誤概念とはいえない。考えの背景にはこの子なりの意味世界がある。こういう発想こそ新たな概念を生み出す可能性がある。誤概念ではなくこの子の発想であるととらえる。個々の子どもがちがう考えをもっている。この子がこういういきさつでこういう考えをしているんだととらえる。間違っている、合っているというラベリングではなく。

○考える、探究する存在としての対等性が教師と子どもにあるか。真摯に材と向き合おうとしている、考える存在として、教師と子どもは対等である。教師自身が教材と子どもたちの間に入れるかどうか。子どもの文脈の中で学ばれた学びは深い学びになる。

○ラベリングのしかたを少し変えるだけで、子どもが生き生きとしてくる。誤ったものを表現したときに、「～くんこうやって考えていたからこうなったんだよね」と言えるようにしたい。子どもが自ら動き出したときにしか学びは始まらない。

<今後の課題>

・児童が意欲的で多くの活動をして気づくことができた分、今後どのように他の児童と共有し、まとめていけばよいか。

・学びが多岐にわたり「子どもがやりたいことができる」一方、子どもどうしの関わりで学びが深まるという面では難しさがある。どうすればよいか。

<来年度へ向けて>（研究テーマ・指導者 等）

・小中連携したという視点は今後も継続していければと考える。また、研究内容と研究方法について、以下のような意見をいただいているので、検討していきたい。

研究内容について

①畔上先生のご指導の中にも「知識・技能」の習得を主な目的とした授業からの転換についての指摘があったり、入試自体が「正確な知識」から「自分なりに考える」にシフトしていったりするので、それらを意識した研究内容にしていくとよい。

②個別最適な学びの方策の1つである自由進度学習の実践を行うのはどうか。

研究方法について

①山本先生の授業から上高井で共通して取り組める手立てを見いだしていくのはどうか。例えば、「子どもが自分なりに試行錯誤できる場面や単元をつくってみる」「子ども自身が実験方法を考え実行し、足りなければ再実験、追加実験できる場面をつくる」「子どもが自分で見いだした問題について実験できる場面をつくる」など

②中学校での個別最適な学び（自由進度学習）を取り入れている学校の実践から単元構成や授業構成を研究していくのはどうか。

<運営面での反省、改善点>（日程・予算・推進体制 等）

・上高井教育会より予算を配当していただき、教材費等に充てられてありがたい。

・委員数が年々少なくなっている。学校によっては参加がないところもある。理科の研究委員会のよさ（小中を問わず、理科の先生方が集まり、自分たちでも教材を触りながら授業を構想したり、自分たちの教材感を伝えあったりしながら研究を深める）を引き継いでいくために、人材を発掘していくことが大切だと感じる。

・毎年授業者の選定に苦慮している。今年度は公開授業を行ったが、なかなか進度を合わせることが難しい面もあるため、委員の先生の普段の授業を公開していただき、都合がつく委員が参加し、それを公開研究日または研究推進委員会に話し合うなど、工夫をしていく必要があると感じている。

〈委員会研究テーマ〉

「子どもが自ら動き出したくなる 生活科や総合的な学習における授業の創造」

〈授業学校学級・授業者〉井上小学校 4年竹組 井澤 滋先生

〈指導者〉上野 浩先生

〈単元材題名〉石と触れ合おう

〈研究の成果〉

「一人一人が思い思いに活動し次の活動を決めていけるように…」

授業者の井澤先生が大切にしているのは、『石という材に関わる中で子どもがどんな意識をもち言葉を発するのか、どんな思いを抱くのか』ということだった。導入の時間は数分。時間いっぱい子どもが石と向き合う時間をとった。拾ってきた石を割ったり、磨いたりして一人一人が自分の課題を探す時間になった。ひたすら石をダイヤモンドやすりで磨く子、友だちと共にどうやったら石を割ることができるか語り合う子たち、割れた石の面を見て中に入っているきらきらと輝くものに驚く子。

今回の授業では「もっとこうしたい!」「次はこうしたい!」と一人一人が自分で課題を見つけながら追究する姿をたくさん見ることができた。自分が予想していたものとのズレや想像もしていなかった新しい発見が、子どもが自ら動き出したくなるエネルギーになっている。研究テーマである『子どもが自ら動き出したくなる 生活科や総合的な学習における授業の創造』の一つの実践事例を提示できた。

授業後に行われた実践報告会では、これまでに Google クラウドで繋がっていたグループで情報を交換し合った。学年の近いグループで実践を交流することと継続して実践を交流してきたことで成果と課題が明らかになり、より深い実践報告会になった。また、新しい実践を発見する機会にもつながった。来年度に向けて自分の学級や学年で実践してみたい内容が見つかり、収穫の多い報告会をすることができた。

〈指導者の先生のご指導〉

石という材が子どもに働きかける。子どもが石を割ったり、磨いたりするその先に見えてくるものをこれから4年竹組と井澤先生が共に探して行ってほしい。子どもが石と触れ合う中で出てくる問いを教師がどう見取っていくか。教師の支援が問われる。

総合的な学習の時間でつきたい力→「生きる力」の育成

(1) 課題発見と課題解決

(2) 学び方やものの考え方、見方を身に付け「生き方」について考える

子どもたちの石へのこだわりとして、石について「自分はこう考える」ということをもつことは、自己の生き方を考えることにもつながる。石に没頭する。(自分の)石ということにこだわる。石のすばらしさを感じる。これらを考えながら深く考え、推察し、とことんやり切り、極めていくことで石の奥深さを追究していく。石という材を通して自己の生き方を考えていく子どもを見取って行ってほしい。

夏の同好会で先生方が子どもになって石と触れ合って考えることもこれからの教材研究の在り方として考えて行ってほしい。

〈今後の課題〉

研究テーマである「子どもが自ら動き出したくなる 生活科や総合的な学習における授業の創造」において、子どもが自ら問いをもつことのできるように、いかに教材研究をしていくかということ。指導者の上野先生から、「先生自らが子どもになって考えていくこと」や「とことん材と触れ合うこと」というヒントを頂いた。

今回、夏の生活総合の同好会で井澤先生を含め、多くの先生方が参加して井上の鮎川に行った。鮎川で先生方が思い思いに活動し、石や生き物、その環境に触れ合った。その後、石を持ち帰り、授業クラスが行ってい

たストーンアートに取り組んだ。子どもと同じことを教師が試してみることで得られること、さらに石の可能性をみんなで考えることができた。しかし、その後の研究推進委員会では教材研究の時間より授業の指導案の作成等に時間を割くことが多く、材について語り合うのみになってしまった。実際に石を割ったり、磨いたりしてみることをしていたら、より多くの見方や考え方を授業者がもち、授業に臨めていたと思う。材に教師自身がとことん触れ合うことが生活・総合的な学習の時間という教科には必要不可欠であることを実感した。

〈来年度に向けて〉

来年度の生活総合研究委員会は、今年度と同様に「子どもが自ら動き出したいくなる 生活科や総合的な学習における授業の創造」という研究テーマで行い、子どもたちが問いをもち、自ら課題を見つけていけるような授業の創造を委員全員で目指していく。

そのために、今年度と同様に Google クラスルームを利用し、オンラインでの実践報告会を大切にしていきたい。学期ごとに実践を語る機会を設けることで、実践の経過を報告し合うことができる。また、学年の近いところで組むことで新しい実践を知り、参考にすることもできる。クラスルームの作成については、5月の総委員会の時に趣旨を説明し、最初のグループの顔合わせをその場で行えるようにする。

さらに同好会との共催で、生活・総合的な学習の時間で実践できる体験的な活動や研修を行っていく。同好会と研究委員会の垣根をできる限り無くし、委員が気軽に研修の行える環境を整えていきたい。体験的な活動は目的を明確にし、今年度のように郡研当日に授業を行っていくなら、その授業者の先生の教材研究も兼ねて行っていけると良いと考えている。

郡研当日の授業においては、指導案を今年度のように簡略化していき、教材研究の時間に推進委員の時間を割いていきたい。

〈運営面での反省、改善点〉

本年度は、授業者の先生と委員長の在籍校が同じだったために情報の交換や児童の実態把握が容易だった。来年度以降、推進委員も含め、委員長、授業者の負担を軽減していくためにも指導案の簡略化や授業の在り方を考えていきたい。参加された先生方の多くが郡研当日の授業の負担について心配されていたり、実践報告会の良さを語ったりしていた。例えば、郡研当日は実践報告会と実際に体験的な活動を実践してみる実践体験会としても収穫は多いのではないかと思う。ただ、授業から学ぶことも多いため、子どもの見取りや実際の子どもと材の関わりを見ることができるとは捨てがたい。今年度のように授業をしてみたいと考えていただける先生がいれば、郡研当日の授業を開催していきたい。そのために来年度5月の総委員会の際に今年度の指導案や授業の様子や教材研究の経緯などを説明していく。

生活総合研究委員会の委員は毎年多く、顔ぶれが毎年変わるのが特徴的である。より多くの先生方に子どもに還る研究会にさせていただくため、生活総合の実践の引き出しを増やしていただくためにも実践交流会と教材研究の在り方を研究していきたい。研究テーマである「子どもが自ら動き出したいくなる 生活科や総合的な学習における授業の創造」を委員全員で考えていきたい。

令和5年度 音楽研究委員会実施報告

〈委員会研究テーマ〉

「みつけよう 音楽のヒミツ 伝えよう 音楽の美しさ」

〈授業学校学級・授業者・指導者・単元題材名等〉

須坂市立旭ヶ丘小学校 5年敬組

題材名 みつけよう！ 日本歌曲のよさ

授業者 遠山 光 教諭

指導者 西澤 真一 先生（千曲市立埴生小学校 校長）

〈研究の成果〉

研究の視点1 探究的な学びを実践していくための題材構想 について

本題材では探究的に「日本歌曲のよさ」を学び、考えを広めたり深めたりしていけるように、探究学習のプロセス（課題設定→情報収集→整理・分析→まとめ・表現）に沿った題材展開を設定した。児童は、主体的に自分の関心のあるテーマを見つけ、真剣に学習に取り組んでいた。また、本時の最後には児童から自然と「赤とんぼを歌いたい。」という思いが生まれた。これは、児童ひとりひとりが、学び方を選択し、自分なりの視点から日本音楽の良さを追究し、味わえたからではないか。さらに、前時まで扱った「待ちぼうけ」と比較して学習をしたことも、児童が学びを深めるために有効だったと思われる。2曲を比較して分析したことにより、前時「待ちぼうけ」の学びが想起され、自然と見通しをもって追究する姿が見られた。また「待ちぼうけ」と比較することで、児童が「赤とんぼ」を前時までの学びと関連付けることができたことにより、「赤とんぼ」に対してより興味関心を持つことができたと考えられる。自分の興味関心から楽曲と向き合い学びを深めていくことで児童は「赤とんぼ」の世界に浸ることができた。

このように、探究的なプロセスに沿った学習が児童の主体的な学びを促し、児童が「日本歌曲」への親しみを深めることができたと考えられる。

研究の視点2 追究の活動で、材・友との対話を促す支援 について

本題材では、児童と材、児童と友との対話を促し、考えを広げたり深めたりするために、①多様な情報ととあえる環境整備、②友と考えを共有して思考を広げる場づくり、③考えが広がった状態での教材に触れる機会確保 を提案した。

①については、1人1台端末でいつでも演奏動画・音源・伴奏音源を視聴できる環境や、教師が用意した音楽記号の意味の表、歌詞の意味がわかるプリント等の準備により、児童が「赤とんぼ」への興味や学びを広げ、どんな追究テーマの児童も安心して学ぶ様子が見られた。一方で、強弱の追究においては、児童の関心が強弱の意味の解釈にとどまり、歌詞や曲想との結びつきまで考えることはできなかった。多様な情報と出合える環境をつくることで、児童が材に働きかけやすくなるが、さらに児童の追究を深めるために、歌いながら確かめる活動や、教師による問いかけなど、個別の学び方に対する手立てが必要だと考えられる。

②及び③については、同じテーマについて調べた子ども同士が情報を共有することで、子どもが個の学びの内容に納得し、理解が深まった様子が見られた。ただ、今回の学習では児童にとって共有のための発表が目的化してしまい、情報共有の必要感が薄かったように見られた。調べ活動時に児童が「僕は歌詞担当」「私は曲担当」という役割意識が強く、体系的に曲を理解する意識が薄かったからだと思う。また、多様な共有方法や共有相手から児童が選択できるようにすることで、より主体的に取り組めるようになるのではないかと考えられる。

研究の視点3 何について考えるのかを明確にした授業のふりかえり について

本題材では、児童の学びの深まりを目的に、学習問題「日本歌曲のよさ」を中核に据えて、毎時間のふりかえりと題材末のふりかえりをしたところ、下のような記述が見られた。

①：第2時「待ちぼうけ」のふりかえり ②：第3時「赤とんぼ」のふりかえり ③：題材末のふりかえり

S児 ① 詩の工夫がわかったから、より詩を楽しんでできた。
② 曲の工夫が知れたことで曲の世界観により入り込んできた。
③ 日本特有のリズム・歌い方などから（日本歌曲のよさが）きているのだと思う。

①で歌詞の工夫を、②で曲の工夫を調べたからこそ、S児は両方の視点から日本歌曲のよさを感じ取ることができたとわかる。同じ視点からふりかえりを行うことで、授業の回数を重ねたことによる学びの広がりを見ることができるといえる。その一方で、S児が「工夫を知れた」より、もう一步学びを深めるようにするには、もう一步深掘りした学習課題が必要になってくることが示唆された。

G児 ③ 昔から歌い継がれてきた事、そしてやっぱり、作詞者、作曲者、演奏者がたくさん工夫をして、それらのことがあって、日本歌曲のよさにつながっているのだと思う。

題材末に学習問題「日本歌曲」のよさはどこからきているかについて、自分なりの答えを出す活動をすることで、題材内で取り扱った3曲を、G児なりに、より汎用性の高い考えとしてまとめることができたと考えられる。

〈指導者の先生のご指導〉

- 探究的な音楽の授業の目的は「子どもたちが主体的に音楽を学ぶことができるようにする」といふこと。教師は子どもたちが自分で学ぶ姿勢を大切に、子どもたちが自分で学び方を選べるようにすることが重要。このような探究的な学習の視点を踏まえた授業を、本時として公開していただいたことが素敵。
- 探究的な学習は、子どもが主体的に学び、学びを選択できることが求められる。そのために、子どもの興味や潜在的な力を引き出すため、教師には柔軟な手立てが求められる。音楽以外にも使える学び方なので、今回の授業を参考にして実践を重ね、これからの授業に磨きをかけてほしい。
- 今回の共有場面では、発表が目的化し、主体的な学びに停滞が見られた。子どもが共有方法・共有相手を選択できなかったことがその要因として挙げられ、子どもが様々な場面で学びを選択することの重要性が強調された。
- ふりかえりの焦点が曖昧だったが、より深掘りした学習課題（例えば、「同じ作曲家でも歌詞に合わせて、どんな表現を変えているのか」など）が必要である。

〈今後の課題〉

- ・探究的な学びについて、研究を継続し、蓄積していく必要がある。児童生徒がより学びを深めていくための手立てを考えていきたい。

〈来年度へ向けて〉（研究テーマ・指導者 等）

- ・令和6年度は小学校で授業公開を行う。（R7中・R8小・R9小の予定）
- ・研究テーマは今年度の方向を引き継ぎつつ、授業者の願いや想いを最大限尊重して決める。
- ・研究の視点を設定して研究を推進し、その視点に沿って考察する。
- ・指導案等のフォーマットは昨年度に引き続き今年度の形に固定し、委員長や授業者が変わってもある程度フォーマットが維持できるようにする。

〈運営面での反省、改善点〉（日程・予算・推進体制 等）

- ・今年度委員長はできるだけ次年度も推進委員として運営面でサポートする。
- ・R6年度委員長候補者はR5年度副委員長をお願いする。
- ・研究推進委員の人数は8名程度（次年度は小学校6名、中学校2名）が望ましい。
- ・令和6年度は小学校親善音音楽会（11月8日）と郡研授業公開日（11月6日）が近いので、音楽の授業公開の日程変更も視野に入れて検討し、授業者に負担がかかりすぎないように配慮をする。

○委員会研究事項

「資質・能力の3本柱について、小・中で共通してどのように指導していけばよいか」研究する。

○研究の成果

公開授業を快く引き受けてくださった鈴木真宏先生から、「小学校1年生の子どもたちにキットパス（水性クレヨン）でガラス窓いっぱいに描かせてみたい。描くことに自信のない子も、きっと楽しく描いてくれるはずです。」との提案があり、郡研究日・11月8日（水）日滝小の玄関ホールにて授業を公開していただき、生き生きとした子どもたちの表現から教材の良さと可能性とを学び合うことができた。

1 研究授業者 鈴木 真宏先生

2 授業学級 日滝小学校 1年東組

3 助言者 高山 顕光 先生（飯山市立木島小学校長）

4 題材名 「まどいっぱいにえをかこう」

5 授業のねらい

キットパスメディウム（水溶性のクレヨン）を使って、大きなガラス窓に向かって思い思いに楽しく描いてほしい。

6 授業の実際



「いっぱいにかこう。ガラスをおさないようにかこう。」という鈴木先生の言葉が終わるやいなや、描き出す子どもたち。歌を口ずさみながら次々と描く人、描いては消しを全部で11回繰り返して納得ゆく絵を描き上げた人、何色も重ねてじっくりと塗り込む人など、全員が制作に没頭した。

途中から、ガラス窓を開けて外に出る人が増えると、窓ガラスの両側から描いたり、隣同士で絵をつなげたりなど、関わり合いが増え、窓ガラスいっぱいに楽しく造形活動が広がった。

最後の鑑賞会では、自分の絵を見て欲しいと手を上げる人がとても多く、授業時間内には収まりきれないほどだった。

7 成果と課題

腕をいっぱいに伸ばして体全体で描く開放感と、さっと拭いて描き直せる安心感とがあり、子どもたちは時間一杯夢中になって取り組めた。気に入った作品を写真に撮ったり、お互いの良さをたたえあったりするなど、作品鑑賞を充実させることが課題である。

○助言者のご指導から

〔活動のやめどきについて〕

→表現を楽しんでいるかorその行為の運動（動き）を楽しんでいるかを見ていく。

感じたことを言葉にして、自然に発する心の動きを見ていく。

わくわくするように構想する わくわくする指導の視点 わくわく感を引き出す指導。

〔自分の好きなものを描く子どもたちに対して教師の言葉がけについて〕

→「わあ、すごい」「いいね、ドラえもん」よい言葉がけがあった。

〔新しい教科書について～低学年～〕

→写真を見ながら「何が好きだった？」対話を中心に心の動きをとらえる活動が位置づけられている。

自己肯定感を一步一步高めていくためのステップ 生涯学習の視点も含まれる。

ひとりひとりが語る場面は自立の場でもある。

〔キットパスについて〕

→描いたり、消したりする安心感、片付けやすいよさがある。

〔次時はどうしたらよいか？〕

①満足するまで描く、大事なはその後。

②美しいものを感じ取るために、ガラスをきれいにリセットしてからはじめる。

③撮影をすることによって、好きなのところと言えるよさがある。

④制作中のけんか → この場所はあなたのものだけではないよ みんなで使う場所を理解するチャンスであり、共同作業に発展していくチャンスでもある。

○今後の課題

- ・ICT 活用のスキルアップ。（研修会の実施とサポート体制作り。）
- ・教科書題材をどう深めるか。技能差・進度差への対応。

○来年度へ向けて（研究テーマ・指導者 等）

- ・研究テーマ 本年度テーマの継続研究。
- ・研究方法 教材研究を行ったり、各校工夫した授業を行ったりして、実践報告会で情報交換する。

○運営面での反省、改善点（日程・予算・推進体制 等）

- ・本年度支出： 講師 5,000円 会場校謝礼 6,000円 茶菓代 350円×12人
教材費 20,460円 慰労会費 6,120円
- ・郡研究公開授業が、複数集中してしまった学校では、図工美術の公開授業に参加できない委員が出てしまった。各委員会ごとの連絡調整が必要ではないだろうか。

令和5年度 体育・保健体育研究委員会実施報告

<委員会研究テーマ>

「すべての子どもが運動の楽しさを感じ、自分なりに学びを深める授業のあり方」

<授業学校学級・授業者・指導者・単元名>

授業校・学級 須坂市立森上小学校 5年智組

授業者 原 勇介 先生

指導者 信州大学学術研究院(教育学系) 准教授 藤田 育郎 先生

単元名 タグラグビー (ボールゲーム)

<研究の成果>

◎ガイドラインの活用

教師の作成した「学びのガイドライン」をみながら児童が主体となって進めていく授業を構想した。このガイドラインには学習のねらい(楽しみ①、楽しみ②)、ゲームのルール、動きのポイント、練習の方法などを示し、子どもたちは単元の始めの段階でどのような学習をしていくのか、どのように進めていったら学びが深まっていくのかを見通すことができると考えた。また、ガイドラインはタブレット端末を使って児童に配布され、お手本動画や練習方法の動画などをすぐに見ることができるようにしておいた。このガイドラインの活用により、子どもたちは教師の指示を受けることなく、自分たちでチームの課題を見つけ、作戦を考えたり、相手や自分たちの状況に応じながら新たな作戦を考えて試したり、練習方法を考えてチーム練習を行ったりするような姿が見られた。

◎「フレンドシステム」の導入

単元を通して同じメンバーで構成されたチームで活動していくのではなく、少人数のチーム同士を組み合わせた「フレンドシステム」を導入した。「フレンド」となるチームは数時間単位で変わるようになっており、それぞれのチームで考えたよい動きや質の高い学びを学級全体に広げていくことができると考えた。このシステムを使って授業を進めていくことで、お互いのチームへのアドバイスが自然と生まれ、対話的な活動を促すことにつながった。実際授業の中で子どもたちがチームの作戦や練習方法について会話をしている場面が多く見ることができた。

◎児童の実態に合わせたルール

ゲームを始めたばかりのときは、5回タグを撮られたら攻守交代というルールで行っていたゲームを進めるうちに守りの動きがうまくなり、5回のタグではトライすることが難しくなっていた。そこで、子どもたちと相談をしながらタグの数を4回に減らし、最後は3回のタグで攻守交代というルールになった。子どもたちがゲームの面白さを味わうことと、学習を進めていく中で攻守のバランスが崩れてくるときがある。そのときの子どもの実態に合わせ、ルールを変更していくこと、また、ルールを変えてもよいということを前提にした単元にしておくことは、大切であるということが見えてきた。

<指導者の先生のご指導>

今回の授業ではボールを投げてのパスを行わず、手渡しのみで行ったところによさがあった。パスを出す側はどこへ投げればよいか、その距離感など、多くのことを考える必要があり、パスを受ける側はどこで受けたらよいか、うまくキャッチできるかといった問題が生じてくる。取られたらすぐに後ろを向いて誰かにパスをして、という初めてタグラグビーを行う子どもたちにとって、扱いやすい運動になっていたのではないかと感じた。学習カードを見ると、分量がとて多いと感じた。授業外の時間に書いているということだが、授業が始まる前にしっかりと見通しを持っていくことがうかがえる。

授業者の反省から、「運動領域によってガイドラインを使ってもうまくいかなないときがある」とあったが、運動領域ごとに異なった学び方があるのが体育の特性であり、運動の課題性に応じた学び方を整理していかれるとよいのではないかと感じた。

研究全般ではテーマにある「すべての子どもが自分なりに学び深める」という言葉に「個別最適な学び」とのつながりを感じる。すべての子どもが自分なりに学び深めていくためには教材の問題（いかに易しい教材を提供できるか）と、その領域の特性に適合した考え方を育んだり、課題解決を見通せたりすることが重要になってくる。また、体育では一定の目標と個々の目標に差が生じ、個別最適な学びを見通していくことが難しい。そこで、目標に階層をもたせ、個に応じた目標を設置したり、技を広げたりしていくというような工夫が必要になってくるが、その案配が難しい。

個別最適な学びでは「学習の個別化」視点を積極的に導入していくことが大切であるが、「協働的な学び」を志向・組織していくことが大切である。今までは、同じことを同じように学んできたことによる協働的な学びがあったが、一定の目標を土台にしながら、個々に違った目標にアプローチしていくことで、互いの考えの違いや気付かなかったところを理解し合うことで協働的な学びが生まれてくるのではないかと思う。

<今後の課題>

今年度研究した「子どもが主体となって学習していく授業・学び方」は、「個別最適な学び、協働的な学び」と深くかかわっていることが見えてきた。今後は、これら「個別最適な学びと協働的な学び」を体育の授業の中でどのように位置づけ、実現させていくかについて、さらに深めていきたい。

授業で作成した「学びのガイドライン」を、郡内の体育の授業を行う先生方で共有できるようなシステムを構築していくことで、研究の成果を生かすことにつながるのではないかと考える。

<来年度に向けて>（テーマ・指導者等）

本年度同様、授業者および授業校の意向に合わせ、授業を行っていきたい。

<運営面での反省、改善点>（日程・予算・推進体制）

- ・推進委員会は計6回行った。年間計画に位置付いており、ありがたかった。
- ・推進委員や授業者の選定が難しい。特に、推進委員は毎年あまりメンバーが変わらないので、やりやすい面もある一方で一部の先生方で運営しているという側面もある。もっと多くの先生方が関われるような仕組みがあると、より意義のある活動になっていくのではないかと思う。

令和5年度 家庭科、技術・家庭科研究委員会実施報告

<委員会研究テーマ>

「一人一人が共に拓く家庭科,技術・家庭科の学習」

～ゆたかな生活につながる授業の改善～

<授業学校学級・授業者・指導者・単元題材名等>

○郡研究日の公開授業は行わなかったが、毎回の研究推進委員会で、日頃の授業の様子を発表し、お互いの授業に活かせる点を出し合って情報共有することができた。

○郡研究日には、須坂創成高校へ見学に行き、農業科の施設見学や講演をお聞きした。

<研究の成果>

今年度は研究日に授業者を立てる公開は行わず、日々の授業改善のための研究推進を実践してきた。家庭科、技術・家庭科の教員は各校に1人ずつしかいないため、普段からお互いの授業を見ることができない。そのため、今回は普段の授業の様子をお互いに発表することでお互いに授業に活かせる点を出し合うことができた。

定期テストについて

各校に1人ずつしかいない教科のため、お互いのテストを見合うことがなかった。そのため、テストを持ち寄って見合った。

● 成果

今まで他校のテストを見たことがなかったので、お互いがどのような内容を出題しているか分からなかった。だが、見合うことで出題している内容がほぼ一致していることが分かった。

● 課題

どの学校も記述式の問題をどのように扱うかに悩んでいた。解答の見方によっては、正答が多岐にわたってしまうことも考えられるため、正答をどのように設定するかが大切であると思った。

教材について

本研究会に初任の先生もいたことから、普段の授業でどんな教材を使っているか示していただくことが多かった。

● 成果

実際に教材を持ってきてもらい、提示していただけたのでとても分かりやすかった。家庭科、技術・家庭科は実際に触れてみなければ分からないところも多いため、とてもありがたかった。

● 課題

発表を分かりやすくするために、普段の授業を紙面にまとめていただいた。まとめるために時間がかかってしまった。だが、「まとめたことによって自分の実践を振り返ることができた」という肯定的な意見もいただいた。

須坂創成高校について

普段は知ることができない高校の施設やカリキュラムなどを知ることができて良かった。須坂創成高校には本研究委員から質問を募り、お答えいただく形をとらせてもらった。質問内容としては、

- ① 畑がなくても栽培できるような学習を行っているのか
- ② 地域との連携は行っているのか
- ③ 導入している最先端技術とは

- ④ どんな生徒を必要としているか
- ⑤ 3年間の学習内容はどうなっているか
- ⑥ 入学後にイメージと違ったという生徒はいるか
- ⑦ 身内に農業をやっている人がいない生徒がなじむことはできるのか

以上の内容を聞いた。

この質問に対して、須坂創成高校からは

- ① 植物工場を利用した学習を行っている。
- ② 園芸農業科は、須坂駅前飾花活動や森上花壇の造成。食品科学科は、高校生スムージー開発プロジェクト。環境造園科は、臥竜公園桜樹勢回復作業。その他に、近隣イベント等での販売実習やワークショップ、専門機関と研究活動の連携を行っている。
- ③ 人工光型植物工場、自然光利用型植物工場、バック栽培野菜用システム、溶液土耕システム、圃場水管理システム、自立走行無人草刈機を導入している。
- ④
 - ・自らを律し、学習し続ける態度を持ち、須坂創成高校への入学を強く希望している人。
 - ・他を思いやる心を持ち、社会のルールやマナーを守って高校生活を送ることができる人
 - ・専門知識と技能の習得に対し、意欲的に取り組もうとする意志の強い人
- ⑤ 須坂創成高校の農業科は「園芸農業科」、「食品科学科」、「環境造園科」の3学科があり、入学時には学科の所属を決めず、2年次からコース選択により所属学科を選ぶ「くくり・コース制」を採用している。
- ⑥ 農業科については、農業のイメージがしやすく、1年生は基礎的な内容を学習し、2年次から7つのコースより選択して学習を進めるため、イメージと違ったという生徒は少ない。
- ⑦ 将来の後継者希望で入学してくる生徒もいるが、多くの生徒は農家の家庭ではないので、農業経験がなくても問題はない。

<今後の課題>

- ・今年度は郡研究日の公開授業は行わなかったが、互いの実践について情報交換ができたことはとてもありがたかった。だが、今回の形式を毎年行うことは難しいと考える。そのため、公開授業と情報交換を隔年で行うことがよいのではないかなと思う。

<来年度へ向けて>（研究テーマ・指導者 等）

- (1) 来年度の全体研究テーマ …県や郡のテーマと同じ方向で進めていきたい。
- (2) 研究委員会の方向，研究の進め方，日程等
 - ・今年度の課題を受けて、授業公開と情報交換を隔年で行っていきようにしたい。授業公開は、技術分野と家庭分野の公開を交互に行っていた。そのため、来年度は技術分野で授業公開を実施したい。
 - ・コロナウイルスやインフルエンザ感染拡大防止のために、参集の必要がない時にはZoomでの研究推進委員会を行っていきことも検討したい。また、googleクラスルームを活用したり、研究委員会の時期を考慮したりするなどして、研究委員会の目的が明確化された開催方法を決めていきたい。

<運営面での反省、改善点>（日程・予算・推進体制 等）

- ・郡研究日の参加者の連絡が遅くなってしまったため、参加する先生方が混乱する事態となってしまった。参加者を早めに確定し、余裕をもって連絡ができるようにしていきたい。
- ・家庭科、技術・家庭科教育研究会の県大会や地区大会に参加できるように研究推進委員会の中でも連絡を行い、多くの研究推進委員が研究会に参加できるようにしていきたい。

令和5年度 外国語活動・英語研究委員会実施報告

<委員会研究テーマ>

主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒の育成

～小中連携を通して～

<授業学校学級・授業者・指導者・単元題材名等>

郡研究日の公開授業は行わなかった。推進委員会の中では、小中連携を通して主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒を育成するにはそうしたらよいかという観点で日頃の授業の様子を伝え合ったり、お互いの授業に活かせる点を出し合ったりして情報共有することができた。

・指導者：信州大学 酒井 英樹 教授

山梨大学 田中 武夫 教授

<研究の成果>

今年度は、『「主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童生徒の育成」～小中連携を通して～』というテーマを据えて、日常の授業改善のための研究を推進し、テーマ具現に向けた実践を積み重ねた。郡研当日は、山梨大学の田中武夫教授をお招きし、高山中学校区、東中学校区、相森中学校区の先生方が小中連携して行った実践例についての報告をした後に、田中先生よりご講演いただいた。実践報告では、「小中の連携を通してお互いの学習について知ることが出来るとともに、子どもたちの学習意欲が高まる」といった成果が報告された。その一方で、「実践を行いやすい中学校区とそうでない学校がある」、「教員同士の細かな連携が必要となり再現性が少ない」といった課題も見えてきた。会員の先生方からは、「山梨県での授業の様子を交えて教えていただき、興味深かった」、「小中連携も見据えた学習活動を行うことで、教科横断的な学習活動にも発展できるし、小学校から中学校へのつながりもより強くできる」、「授業作りでも、最終的には「目的・場面・状況」を確認して作っていききたい。また、パフォーマンスに対する評価「ルーブリック」について、実践内容をお聞きできたことがとても勉強になった」といった感想をいただいた。

<指導者の先生のご指導>

田中先生からは、山梨の小中学校で行われた実践例を資料や動画とともに分かりやすく教えていただいた。単語や文法をしっかりと学んだ後に実際に使ってみるという従来の指導を脱却し、『使いながら学んでいく』ことの大切さについて教えていただいた。また、教師とALTとの対話、子どもたち同士の対話と同様に、教師と子どもたちとの対話を沢山取り入れていくことや『目的・場面・状況』の設定を行い、子どもたちにとって英語を学習したり使用したりする必要感を持たせる重要性についても教えていただいた。

酒井先生からは、中学校の学力調査の結果を受けて、通常の授業を学力調査にどうつなげて行くかという点でご指導をいただいた。普段の授業の中で、目的・場面・状況の設定を工夫し、その単元でどのような力をつけることになっているのか再度見直した上で授業作りを行っていく必要があるということを教えていただいた。

<今後の課題>

来年度も研究日に授業者を立てる公開は行わない方向で良いと思う。1日1時間の授業の重みを十分に理解しつつも、授業を行う先生のご負担や、コロナ禍で秋から冬にかけて先が読めない中で授業場面を設定する難しさもある。研究会自体も今回のようにハイブリッド形式で行うことができたので、今後も外国語活動・英語研究会が持続可能な形で続いていくためにも、この流れを継続して良いと思う。テーマを小中連携としたことで、小学校と中学校の教員が同じ視点で授業作りを行えたことや子どもたちの動機付けにはなった一方で、連携が図りにくい学区があったり、連携を図るにしても行事等の兼ね合いで難しかったりしたことが課題である。。推進委員の人数は小学校3人, 中学校3人の6名で行ってきたが、研究推進日設定などこの規模が都合良かった。

<来年度へ向けて> (研究テーマ・指導者 等)

継続の方向で良いと思う。指導者の先生にも早めに連絡を取りたい。指導者の先生のご都合に合わせて外国語活動・英語の研究日を変えることも可能か検討したい。

<運営面での反省、改善点> (日程・予算・推進体制 等)

当初指導者としてきていただく予定だった酒井先生が、当日ご指導いただけなくなった。余裕を持って早い段階から連絡を取っていく必要がある。急遽、郡内で使用している教科書会社である三省堂の方をお願いをして、講師の先生を紹介していただいた。また、郡研当日のご指導の中で、指導者の先生と推進委員とでやりとりをしながらモデルを示してもらった場面があったが、リモートで参観している先生方にとっては分かりにくくなってしまった。指導者の先生との連携を密にして、当日のご指導が可能かどうか、またどのような指導をいただけるのかについて詳細を知った上で、当日の運営が出来ればよかった。



令和5年度 道徳・特別活動研究委員会実施報告	
<p><委員会研究テーマ> 「子どもが自分に引きよせて考える道徳授業のあり方」</p>	
<p><授業学校学級・授業者・指導者・単元題材名等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業学校 井上小学校 ・授業学級 1年竹組 ・授業者 長田みゆき教諭 ・指導者 池田町立会染小学校教頭 野田久美子先生 ・主題名 「家族の一員として」内容項目C(13) 家族愛、家庭生活の充実 父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つこと ・資料名 「かやねずみのおかあさん」 	
<p><研究の成果></p> <p>○今回の授業では自分に引きよせて考えるために、以下のことが大切であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問い返しや子どもの発言をひろってつなげること。子どもの発言を問い返すことで、その裏にある本音を引き出すとともにその子自身が考えを深めるきっかけになる。また、発言をつなげることで、子どもが出された意見どうしの関係性を考えるようになる。 ・導入でシンプルかつ明確に道徳的価値に焦点化すること。そのことで子どもが自分の道徳的価値をふり返り、題材を自分ごととして考えていけるようになる。 ・日頃の学級経営。子どもが「本音を話しても良い」という雰囲気学級にできていた。普段から教師との良い関係性や語れることの保証があることが大切。 	
<p><指導者の先生のご指導></p> <p>1 研究委員会で大事にしてきたこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業者の教材観をもとに、各自が指導案を作成した。 ・委員全員で毎回意見交流を行った。 <p>これらの2点は、郡の研究委員会がまさに「自分ごと」となっている。今日の研究協議も「自分ごと」そのものである。</p> <p>2 長田先生の授業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業前、元気で明るい雰囲気。自然に拍手が起こる関係性。心が解放されている学級。 ・道徳の授業は「道徳的心情、道徳的判断力、道徳的意欲・態度」のいずれかを養う。今日の授業は「心情」だと主題設定に明確にされている。 ・導入の場面では、価値観との出会い、教材との出会いが非常に良かった。ここから全員が同じ土台に乗って考えることができた。 ・Y児は導入の意見から展開のところで心情の変化が見られた。想定していなかった「おかあさんねずみが今死ぬわけにはいかないから母も子も一緒ににげる」という意見にずっとこだわっていた。 ・展開で授業者が弱さへの共感（母ねずみがきつねに食べられてもいい）をしたことで、「いや食べられるわけにはいかない。この先も子どもたちを守るため、ずっと幸せにくらすために」という意見につながった。 ・テーマの「引きよせる」では、「お母さんねずみ」の思いから子ども（自分）へと転換することで、「家族のためにできることをやっていきたい」という思いにつながったのではないかと。 	

- ・授業者の見届け、見取りが素晴らしかったからこそ、「本音を話せる子」が育っている。

<今後の課題>

- ・今回のような「お母さん」と「子どもたち」という双方向の思いがあってこそ成り立つ関係性は、どちらの思いも考えたり、可視化したりしていけるとさらに良い。
- ・題材の内容理解をできるだけ短い時間で行いたい。そして、補助発問や中心発問を考える時間や、それを話し合う時間を十分に取りたい。
- ・終末の自分の考えを書いたりまとめたりする時間は確実に取りたい。

<来年度へ向けて>（研究テーマ・指導者 等）

- ・研究テーマの「自分に引きよせること」は継続していきたい。道徳の授業を行う上で自我関与することは絶対的に必要なことだと考える。
- ・指導者の先生は、今回お世話になった野田先生を含め、道徳の主事のご経験のある先生や現在道徳主事の先生にお願いしたい。

<運営面での反省、改善点>（日程・予算・推進体制 等）

- ・井上小学校で3教科同時の公開になり、当日の運営や動線の確保など会場校の先生方に多くの面でご協力をいただいた。大変ありがたく、助かったが、できれば複数教科が同会場とならないような体制が取れると良い。
- ・学校の垣根を越えて研究していく部会は素晴らしいが、反面で日程が合わず全員が集まりにくい面がどうしてもでてきてしまう。できれば、学校行事が重なることは避けていただけるとありがたい。

令和5年度 特別支援教育研究委員会実施報告

<委員会研究テーマ>

「できる喜びや達成感を感じることができる支援のあり方」
～中学の特別支援学級（自閉症・情緒障害）での支援に学ぶ～

<授業学校学級・授業者・指導者・題材名等>

期 日 令和5年11月8日（水）

授業学校学級 小布施町立小布施中学校 プライム学級（自閉症・情緒障害）
1年：2名 2年：3名 3年：2名 計7名

授業者 久保田 英子 教諭

題材名 自立活動「他者の気持ちの理解」

指導者 北信教育事務所学校教育課指導主事 遠田 敦 先生

<研究の成果>

○本年度は授業公開の年で、中学校における特別支援学級の授業を見て研究したいという要望を受け、小布施中学校が自立活動の授業を公開してくださった。中学の自閉症・情緒障害学級という点を考慮して、研究授業はライブ配信とし、その後6つのグループに分かれて授業研究会をおこなった。（以下、参会者の声より）

1 自立活動について

- ・自閉症、情緒障害学級で、全員が参加する形の自立活動を仕組むことへの重要性や大変さを感じた。
- ・中学の自閉症ではなかなか設定しづらい自立活動の時間を確保されていて、生徒たちに話し合わせる形式で取りくまれたことが、とても参考になった。
- ・イライラは悪ではないということ子どもたちに伝える必要性について、生徒同士がお互いに「イライラすることあるよね～。わかる～」と言い合えることや、イライラした気持ちの中身（悲しい？悔しい？）を言語化することの大切さなどを強く感じました。

2 個別の指導計画を活かした授業構想

- ・個別の指導計画を活かした授業内容、評価へのつなげ方がとてもわかりやすく記されていて良かった。
- ・個別の指導計画を活かした授業構想、日々の自分自身の実践を振り返るよい機会となった。実態と可能性の芽、本時でつきたい力、そのための本時の手立て、自立活動を行っていく中で、とても大切な視点だと感じた。

3 抽出生の姿から学ぶ教師の具体的支援の在り方

- ・生徒たちが自分の思いを自由に語ることができていて、久保田先生との信頼関係が厚い事を感じた。
- ・個々の実態を把握され、信頼関係を結んでおられることを、先生と子どもたちの様子から感じ子どもたちは安心して発言していた。
- ・エネルギーのあふれるにぎやかなクラスで、久保田先生のあたたかなご指導の下、伸び伸びと育った子供の姿だった。日頃の先生のかめ細やかなご指導あつての信頼の姿だったと思います。
- ・生徒達の必要性に訴えられるのか、共有することに意味をみいだせるのか、教師の働きかけにかかっているのか、子供達を良く知った上での課題設定ができるかどうか重要だと感じました。

<指導者の先生のご指導>

○自立活動で大切にしたいこと

- 自立活動の自立とは、自分の持っている力をどこでも最大限発揮すること。それができるように学習するのが自立活動である。
- 6区分27項目ある中から必要なものを選んで指導していく。
- 自立活動の時間を位置づけることが大事。1時間全部でなくてもよい。
- 自立活動は苦手なことやできないことをさせられる活動になりがちだが、子どもが得意なことや、どうなりたいかという子どもの願いから始まるのが大事。なぜアンガーマネジメントをするのか、なぜ他の人の気持ちを知るのか、子どもにとっての必要感、学ぶべき必然性が大事である。子ども自身が育ちの実感を持ち、意欲の向上につながるようにしたい。
- 自立活動は、本時だけでの評価ではない。今日学んだことがどこで発揮されるかを評価したい。学習したことを家庭にも発信して、生活すべてで発揮できる力でありたい。
- イライラすることはいけないことではない。感情を抑えるのではなく、対処法を学ぶことで人間関係がよくなり、自己肯定感を高めるということを教師が意識しておきたい。
- 対処法を学ぶこととともに、伝え方を学ぶことも大事にしたい。

○小布施中学校の授業から学ぶこと

- 久保田先生の学級作り、人間関係作りのすばらしさ…自情障学級の生徒は何かいいのかどうすればいいのか分かっているが、通常級の教室ではそれができないことを久保田先生はわかっている。通常級の教室では言えないことを自情障の教室で言っているということを理解して受け止めてくれている。子ども理解というところに久保田先生の学級作りのすべてがある。
- イライラの温度計は視覚支援として有効だった。先生のイライラ場面も絵があると先生の話の状況がイメージしやすかったかもしれない。
- 久保田先生との関係がいいので、先生のイライラの解消法を考えるという設定はよかった。友だちとの関係もいいので、友だちのことで考えるのもよかったかも。
- 司会の役割の中で活躍できた。一人一人が自立活動の目標を達成できる場面が大事。
- 不規則な発言の中に時々本音が見える。そこをひろいたい。子どもの発言を制限するのではなく、たくさん出た中で整理していくとよい。
- 振り返りカードは番号を書く形式だったので、書くことが得意ではない生徒にとってもよかった。全員ができるいい支援だった。
- 「どうしてそれを選んだのか」「どこで使えそうか」まで考えられるとよい。

<今後の課題>

○授業公開の仕方（ライブ配信・事前にとったビデオ視聴ほか）

- 授業者や子ども達の負担にならないように考えることが一番大切である。
- ライブ配信ならば、抽出生を一人に絞り、音声マイクをつけるようにする。

○話し合いのルール

- 活動を通して、話し合いのルールも学んでいけるとよい。「こう言っちゃだめ」ではなく、「こういう条件のものなら言っていていい」と伝えておく。すぐできそうなこととか学校でできることなど、枠組みの中で考えることも大事な力である。

<来年度へ向けて> (研究テーマ・指導者 等)

○教育課程との兼ね合い

- ・隔年で授業公開することになっているので、来年度は郡研では授業公開せずに、教育課程で授業公開となる。

○研究テーマの候補

- ・研究テーマの希望として、自立活動の実践発表、インシデントプロセス法 (一昨年度の反省より、インシデントプロセス法を行う場合は、いくつかのテーマを決めて行う方法を検討。)

○指導者

- ・県や北信の教育事務所の指導主事に来ていただければ有り難い。

<運営面での反省、改善点> (日程・予算・推進体制 等)

- ・委員が50名近いということや特別支援学級・特別支援学校の児童生徒の特性から生で授業を参観するという事は難しい面がある。今年度はライブ配信 (4台のタブレットを使用・1台は全体・残りの3台は抽出生を中心に固定) を行ったが、情報共有の面では問題点も多い。通常学級で授業を行う場合でも、50名近いと広い会場が必要となる。今後の授業公開による研究では、抽出生を一人にするか、同時に数台のカメラで生中継するかなどが考えられるが、会場校の授業者の負担や推進委員の負担も課題となる。
- ・推進委員会と特別支援教育にかかわる会議と重なることが多いので、世話係・推進委員の都合の良い日から推進委員会の日程を決めた。また、世話係の先生が郡研当日出張と重なってしまったため、教頭先生にご足労いただいた。
- ・推進委員の人数は今のよう、各中学ブロックと支援学校から1名程度でよい。また、可能であれば中学校からも入っていただく。(今年度は、中学の授業公開ということで、推進委員に中学校の先生方が多く参加していただき、大変ありがたかった。)
- ・特別支援教育の授業公開の年には、信教の全県大会の研究とタッグを組むことで、授業公開の仕方などを大学教授にサポートしてもらったり、運営面や資金面でも補助していただけたりするのではないかという提案もあったので、参考にしたい。



令和5年度 健康教育研究委員会実施報告

<委員会研究テーマ>

「生きる力を育む健康教育」

～摂食障害から心身の健康問題について考える～

<授業学校学級・授業者・指導者・単元題材名等>

指導者：心の発達支援センター長、長野市民病院小児科顧問 青沼 架佐賜 様

<研究の成果>

- アンケート調査により、須高地域でも摂食障害の児童生徒が増加、低年齢化している実態が見えてきた。また、先生方が実際に行ってきた支援や、対応する中での悩みや課題を明らかにし、学び合うことができた。
- それぞれの子ども自身のデータである成長曲線を用いた保健指導は、自分の体や健康について向き合い考える機会となり、自分の体格の実際と自己の認識にずれがあることを自覚するきっかけになった。
- 成長するとはどういうことなのか、成長期に体重が増えることの意味を正しく伝えることで、自分の体の成長を肯定的に受け止めることにつながられた。
- 児童生徒を丁寧に観察し、各校の実態からそれぞれの思いや意識を大切に食の支援や個に寄り添った実践ができた。
- 栄養教諭による食生活の講話の中で、「成長」という視点から養護教諭の話を書く場面をつくることは、連携して実践を練り上げていく一歩になった。

<指導者の先生のご指導>

- 摂食障害は誰にでも起こり得る病気であり、生命にも関わるものであることを再認識して対応していく。児童生徒自身も「成長期の体重減少や偏った食事は危険」と認識できるようにしたい。
- 摂食障害は、やせ願望のある神経性痩せの他に、おう吐等の体験による食物回避性情緒障害等もあること、うつや不安障害、発達障害などを合併することもあることを視野に入れて健康観察をしていく。
- 早期発見のためのポイントとして、体重減少、肥満度、成長曲線のチェック、徐脈などがある。保健室で行う健康観察、健康診断や年3回以上の身体測定は重要で、その後の成長に影響を及ぼすことや、その他の体重減少を伴う病気との鑑別も鑑み、早期に医療につなぐことが大切である。
- それぞれの子どもが抱える背景が複雑だからこそ周囲の連携が大切で、医師、看護師、栄養士、心理士、学校職員がチームとなって個に寄り添いながら長期に渡って支えていくことが必要である。

<今後の課題>

- 摂食障害の児童生徒への対応のあり方について、家庭や医療との連携や学校での体制作り、行動変容に向かうための支援などを具体的にしていく。
- 成長曲線を活用して自分の体について学び、認識を変えていく保健指導を継続して行ってきたい。

○自尊心の低さに対応する心理教育、SOSの教育等、心の健康についての保健指導や支援も必要と思われる。

○養護教諭と栄養教諭が連携して、健康教育としてできることを引き続き考えていきたい。

<来年度へ向けて> (研究テーマ・指導者 等)

○子どもの実態や健康課題を把握し、養護教諭や栄養教諭の専門性を生かしながら「自分ごと」として捉えることができる健康教育を考えたい。

○本年度のテーマとのつながりで、「肥満」についての保健指導や実践を情報交換してみたい。

○過去の郡研研究や、長野県学校保健会養護教諭部会発行の「保健のあゆみ」、研究冊子を活用して現在のニーズに合わせた更なる研究や、保健指導に使える資料や教材作りもよい。

<運営面での反省、改善点> (日程・予算・推進体制 等)

○推進委員会の日程は、研究をすすめて意見交換をするのに適当な間隔であった。

○推進委員会の開始時刻は16時からとした。

○郡研究日の日程、推進委員の人数、予算は適当であった。